特集

学習の見通し・振り返り

児童・生徒が「学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れる」ことが、新しい学習指導要領の「総則」に加わりました。学年はじめにあたり、その実践的課題を追究します。

子どもの物語としての「見通し・振り返り」

愛媛大学教育学部
三浦　和尚

はじめに

学習者の側に立った学習指導の改善ということは、今日、自明のことのように思われるが、明治以降の教育の流れから見れば意外とその歴史は浅い。振り返ってみれば、例えば「小集団学習」とか「課題解決型の学習」といった方法が、日常的な学習の姿として定着し、違和感なく受け入れられている状況は、そんなに古くからのことではない。

「教育内容」に一定の見識があれば指導ができるといった、「教育方法」という概念に乏しい考え方は、「内容」を教師（大人）の論理で学習者に与えるという指導に結びつく。その典型は「講義」であり、さすがに今の小学校ではあろうはずもないが、学習者意識のきわめて希薄な大学では、いまだにこれがまかり通っている。これに近いことは、中学・高校ではあるのではないか。

こういった考え方に立てば、当然学習者は、自分の学びがどこに向かうのかわからないまま、教師の引いていく線の上を、ひたすらにたどりゆくしかない。ゴールとされた時点で、ある種の理解や満足感・充足感が保証されているか否かの問題である。

学習者主体の学びを保証しようとすれば、学習者自身が、「何を」「どのように」学び、その学びに「どのような意味があるのか」を捉えている必要がある。

あえて言えば、教室のできごと（学び）を、「大人の物語」から「子どもの物語」へ転換するということである。

Ⅰ　子どもの物語のために

小学校新学習指導要領（平成二〇年）では、総則第1章第4の2（4）に「各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。」と示されている（これは中学校新学習指導要領総則にも、同様の文言がある）。

「児童（生徒）が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする」ことは、子ども自身が自らの学びについて、「何を」「どのように」学ぶかを理解することであり、また、その学びに「どのような意味があるのか」を捉えることである。それは、学習者主体の学びを保証しようということに他ならない。

また、そのことは、「大人の物語」としても、

指導者側に指導（学習）の「目標」「内容」「方法」を明確化させる働きも有している。学習者に明確に示すためには、指導者自身がそれらを明確に捉える所に追い込まれざるを得ないということである。

学習指導要領の文言は、おそらくその二面のねらいを持っているものであろう。

Ⅱ　学習の見通し

学習者が学習の見通しを持つ必要性は、例えば、ワークシート記入など、ある作業をしようとするときに、「何分間で」「何時までに」といった指示が必要かつ有効であることでもはっきりする。あるいは、今やっていることが次にどのようにつながるのかがはっきりすることによって、さまざまな工夫が可能になり、今の作業の質が変わってくるということもある。

「見通しを持って行う」ことは、その活動の意味を理解し意欲を持つ、その活動の意味によって活動内容を考え工夫する、その活動の工程（時間）を調節し効率的に取り組むなどの意味を有している。

そういった「学習の見通し」を計画するについて、いくつかの視点から考察したい。

1　導入の役割

単元全体であれ、一時間の展開であれ、その導入の役割に違いはない。

導入は一般に、

① 学習への意欲化
② 学習の前提となる知識等の確認
③ 学習の見通しの確認
④ 学習への身構えの形成

等の目的が求められる。無論それらが複合することもある。

導入において「学習の見通し」を立てることは、学習の始まりの位置づけとしてある意味当然のことである。

これからの学習において「何を」「どのように」学ぶかをどのように明示するかは、多様なパターンがあろう。

例えば、「物語を読む」学習で、本文に入る前に何をしないといけないかと言われれば、何か見通しを立てたほうがいい場合もあれば、そうでない場合もある。学習の流れが、学習経験から既に学習者に暗黙裡に了解されている場合は、あれこれ指示するよりも、むしろ物語に早く入った方がいい場合はあろう。「何時間くらいで勉強します」といったことであれば、あえて伝えるようなことではない。

しかし、物語の学習であっても、朗読発表を行う、劇にするなどの展開がある場合は、それなりの見通しを伝えておく方がよいということはある。

討論会や文集作りなどの、読むこと以外の学習活動であれば、学習展開の見通しは必ず必要である。

2　学習の手順・内容の提示

討論会や文集作りなどの学習の場合、教科書による限りは、多くの場合、「何を」「どのように」学ぶかという学習の全体像は、教科書そのものに提示してある。場合によっては、作品例など学習の帰着点のイメージも添えられていることがある。それは、教科書の記述自体が、「学習手順の説明」として機能しているということであり、教科書をどのように使うか、つまり、どのようなタイミングでどのように確認させるかという扱いの問題となる。

しかし、教科書をそのまま使用しない場合は、教科書に代わる学習手順の提示をどのようにするかということが、「学習の見通し」となる。

その際、当然のことながら、単に「学習手順」の提示にとどまらず、ここで何を学ぶか、ここでどのような知識や技能を身につけるのかといった、学習内容・目標の提示も考慮する必要があろう。

3　見通しの内実―めあてと指導目標―

「学習の見通し」には、既に述べたように、

学習手順の見通しと、学習内容・目標の見通しがある。授業の初めによく見られる「めあて」の提示は、後者であり、その授業の学びを明確にする意味で、最近は提示する方向で考えられているようである。

しかし、その具体を見たとき、その提示の仕方には工夫が必要ではないかと思われるところがないではない。

例えば、次のような提示はどうであろう。

A「やまなし」の朗読発表会をしよう。

B　速さや間に気をつけて「やまなし」を朗読しよう。

Aは、学習目標の提示はない。しかし、学習者は発表会に向けてがんばろうという目的は確実に理解する。指導者は、その過程で、発表会を成功させるにはいい朗読をしなければならないことを示し、そのためにどんな工夫をするかを考えさせ、身につけさせるよう仕掛けることができる。

Bは、学習内容の提示としては具体的で明確である。しかし、学習者が「面白そうだ」「がんばろう」と感じるであろうか。

私は、基本的に小・中学校段階であれば、Aの方向でいいのではないかと考えている。ただし、その場合は、「学習の振り返り」をきちんとして、自分の学びを振り返り、知識・技能を定着させる場面を保証する必要はあろう。

「速さや間に気をつけて「やまなし」の朗読発表会をしよう。」という提示もあるかと思われるが、個人的には、Aで十分だと考えている。学習者が取り組む意識としてのめあてと、指導者が意図する指導目標は、同じ言葉で示される必要はないということである。

同様のことは、「二場面と三場面の主人公の気持ちの変化を読み取ろう」などといった「めあて」でも言える。それを見て学習者が「面白そうだ」「がんばろう」と感じるであろうか。それが、それまでの学習者の課題意識にきちんと沿っている課題であればともかく、初めから技能を前面に出した「めあて」が、学習に向かう起爆剤になるとは思われない。子どもはけなげに指導者の指示に付いて来ているだけである。

4　見通しのスパーン

例えば、「おおきなかぶ」を八時間で読んで、その後三時間で音読劇をするとする。そのとき、合計十一時間の「見通し」を学習者に提示する必要があるかという問題である。

小学一年に読むことと音読劇をつなぐ十一時間の見通しがイメージされることは難しい。とりあえず、八時間の読むことの学習の見通しを立てさせ、その展開の中で、しかるべきときに音読劇を提示するということは、当然あってもよい。

学習者の発達や、予想可能な範囲を見定めつつ、どのくらいのスパーンで学習手順や課題・めあてを提示するかは、判断が必要なところであろう。

Ⅲ　学習の振り返り

1　振り返りの意義

学習指導要領解説には次のようにある。

「事後に振り返ったりすることで学習内容の確実な定着が図られ、思考力・判断力・表現力等の育成に資するものと考えられる。」

「思考力・判断力・表現力等の育成に資する」とつなぐことは、いささか飛躍の感はあるが、それを「国語の力」と置くのであれば、少なくとも「学習内容の確実な定着」との関係は理解できる。

一般に「学習の振り返り」という行為は、「学習の評価」と考えることもできる。つまり、そこでの学習を振り返り、身に付いた知識や技能を確認（メタ認知）し、さらに今後の学習の見通しを立てるということになる。

あるいはその学習の自分にとっての意味を確認することも振り返りである。その場合は、学んだことの充実感、達成感を味わうことになり、それは、学習への意欲といった態度的な側面の育成には必要なことであろう。

2　振り返りの実際

実際には、個人の単位の振り返り（自己評価）と教室単位の振り返りとが考えられる。

教室単位の振り返りは、そこで一つの認識に到達するということではなく、学習場面として振り返りの時間を設けるということであり、その振り返りの内実は、個々の学習者の中で定着される。それは具体的には、活動の後みんなで感想を述べ合ったり、反省をしたりする場面として表れる。

ただ、その振り返りを評価の一つと捉えるならば、学習者は単に「感想」として述べているにしても、指導者の側には、その学習の目標が明確に意識され、適切な助言が求められることになる。指導者が設定した目標に学習者の意識を性急に引き込む必要はなく、個々の学習者の「振り返り」を大切にしてやればよいが、指導者の目標意識は明確でなければならない。

このことは個人の振り返り（自己評価）においても同様である。指導者が教えたかったことが、学習者の学んだこととして意識され、知識・技能といったことばの力が振り返りの対象の中心となるべきであろう。

3　振り返りとしての味読

読むことの学習においては、「通読・精読・味読」といったときの「味読」も、一つの振り返りとなる。

今日、活動型の学習形態が多く取り入れられているにせよ、三読法の展開が読むことの学習の基本に意識されていることは変わりないと思われる。まず全体を読んで感想・疑問点等の確認をし（通読）、始めから段落や場面ごとに詳しく読み進めていく（精読）。そして最後に、改めて感想をまとめたり、読み直したりして鑑賞するのである（味読）。

考えてみれば、通読後に何をするかは、場合によっては「学習の見通し」を立てることになるし、味読段階は、自分の読みを確認するという意味では、「学習の振り返り」の側面を有している。

味読には、感想を述べたり書いたりする、音読・朗読する、読み聞かせをきく、自分なりの課題を確認するなどの方法がある。それらは、文章内容を振り返り、新しい課題を発見したり、その内容や文章のよさを味わったりする、さらに自分にとっての意味を確認したりする作業である。

問題は、学習展開が精読にとどまり、味読が今日重視されていないところであろう。振り返りとしての味読が位置づけられることが、文学的文章のみならず、説明的文章においても望まれる。

ただ、味読は、多くの場合、文章内容の確認である。味読において、例えば「順序に気をつけて読む」といった技能が意識化されることは少ない点には留意が必要である。

おわりに

学習指導要領で求められていることは、これらのことを「計画的に取り入れる」ことである。それは、目標を明確にしながら、学習指導計画を緻密に構想することを求められていると言える。

本稿ではそれを前提に、「大人の物語」の計画ではなく、「子どもの物語」にすることの必要性を論じたつもりである。

さらに、触れることができなかったが、例えば、体育で「逆上がり」をするという場合、「逆上がり」は到達点として明確に示され、目標となるように、国語科と他の教科とは、この「学習の見通し」については、そのありようがずいぶん異なるところがあるということも考えておきたい。

国語科においては、他教科にまして慎重な対応が求められる。

みうら　かずなお　愛媛大学教育学部教授。国語教育学。理論と実践をつなぐところに徹したいと、最近考えている。